

## 説教 『 闇もあなたに比べれば闇とは言えない 』

小河信一 牧師

### 詩編139編 1節～24節

詩編139は、詩編が全体で150編ある内の、終わり方に属しています。その前後の詩編の中では、やや長い詩であると言えます。そして、詩編139の構成について、例えば、:1-6 **神の全知**、:7-12 **神の遍在**、:13-16 **神の全能**……のように区分されること（A.ヴァイザー）があります。

しかし、ここでは、より簡明にこの詩編を二つに分けることにしましょう。

それは、13節に区切れがあると見て、前後半を捉えるやり方です。すなわち、前半が、**神の全知**または**御業**に関することで、後半が、**私たち**、**人**に関することと捉えるのです。付け加えて言えば、詩の最後の部分 :23-24 は再び**神の全知**で、初めと終わり、神から出て神に帰って来ているという見事な統一性が見出されます。

#### 詩編139:1-2――

1 主よ、あなたはわたしを**究め**

わたしを**知っておられる**。

2 座るのも立つのも**知り**

遠くからわたしの計らいを**悟っておられる**。

「知っておられる」を中心に、:1-2の他にも、:3「ことごとく通じている」や:23「<sup>ため</sup>試す」（吟味する）という用語が重ねられています。そうして、神が人間を「知っておられる」ことが強調されています。

ところで、先週、そして先々週（ペトロの手紙 一 及び マタイ福音書の講解説教）と関係するかのように、一つの使信をお話ししました。すなわち、ペトロの手紙 一 1:13の「身を慎んで」という再臨のキリストを待ち望む姿勢は、「はっきり目が覚めている」（酔っぱらっていない）状態を、聖霊の導きにより保ち続けるということであり、そして、主イエスに「目を開けていただく」（マタイ20:33）ことによって、澄んだ目、信仰上の「よい目」を持つということでした。

マタイ福音書20:34——

盲人たちはすぐ見える（上を見る / 仰ぐ）ようになり、イエスに従った。

突然、二人の盲人の、ただ主イエスの背中を見つめて、主に従いゆく人生が始まりました。二人は、道端から、主イエスの道へと招き入れられました。肉体的に見えている私たちも、自分で「よく見える」と言い張るのではなく（ヨハネ9:40-41）、謙遜になり、主イエスに「見える」ように教えていただくことが大切です。

詩編139の鍵語「知っておられる」の説き明かしに戻ります。

このように、私たちは澄んだ目をもってキリストを見つめましょう、と言われると、私たちはすぐに、自分の目の心配を始めます。例えば、自分の目は、罪と汚れで曇りがちだとか、あるいは、あの人の目は自分のように熟視していないとか、思い悩んだり、あるいは、他の人との比較に走ったりします。

そこで、詩編139は、主イエスに「見える」ように教えていただくという正にその点で、最良の指針となります。

それは、私たちが「見る / 見える」というのはるか以前に、神が私たちを「見ておられる」、「ご覧になっている」（詩編139:11,16,24）ことを、私たちがこの詩編を通じてわきまえ知ることです。

神が「見ておられる」ということは、「知っておられる」と言い換えられます。神は、ことごとく見ておられるゆえに熟知している、あるいは、知っておられるゆえに見張っているということです。

コリントの信徒への手紙 — 8:3——

しかし、神を愛する人がいれば、その人は神に知られているのです。

キリスト教信仰の観点から、「人は神に知られている」ということは最重要なことと言えます。詩編139の最後の祈りは、（神よ）「知ってください」（:23）の連呼で閉じられています。祈り手はそこに望みをかけています。

神が人を「知る」（詩編139:1,2,4,23）ということ、私たちが神を知るより先に、神は私たちを知っておられるということです。それは、私たちが「見る / 見える」というのはるか以前に、神が私たちを「見ておられる」ということと並行しています（参照：ヨハネ1:48）。

私たちに先んじている神の見張り・見守りに、確かな信頼を置くときに、私たちは安んじて、神を見上げることができるのではないのでしょうか。詩人は、母の胎の闇の底にあった時から今に

至るまで、神が自分を「知っておられる」ことを信じています。詩人は、自らの人生の初めと終わりを見渡しつつ、詩編139の祈りの最初と最後に、神の全知を告知しているのでしょう。

ここで日本語の古語を顧みれば、「知る」は「<sup>し</sup>領る」（領有する）であり、「知らず」、すなわち、「お治めになる」ことだと分かります。今、私たちは例えば、讚美歌Ⅰ－164番やⅡ－59番によって、「知らず」（<sup>し</sup>統らす）神を高らかに賛美しています。

その上、神の「お治めになる」そのやり方は、この世の王のように、抑圧的に私たちを支配しようとするものではありません。

「アダムは妻エバを知った」（創世記4:1）という神に祝福された人間同士の深い関係に指し示されている通り、主なる神は、私たち人間と、人格的な関係を結んでくださいます。威圧的に「わたしは、知らず神である」と人を恐れさせるのではなく、神は人を、親しい交わりのうちに招いておられます。人もまた、神を「知る」・「仰ぐ」ように靈的に訓練されます。何よりも、神は、〈告白・賛美・感謝〉（参照：詩編139:14の「感謝する」は上の三つの意味を併せ持ちます）という人の応答を喜ばれるお方です。

ところで、人が神と人格的な関係を結ぶうえで、見逃せないのは、罪と死の問題です。

詩編139:7-8――

7 どこに行けば

あなたの霊から離れることができよう。

どこに逃れば、御顔を避けることができよう。

8 天に登ろうとも、あなたはそこにいまし

<sup>よみ</sup>  
陰府に身を横たえようとも

見よ、あなたはそこにいます。

最初に、罪の問題です。

「どこに行けば」・「どこに逃れば」という虚しい疑問は、エデンの園……まさに神の目から逃れようのない所！……にいたとき、「主なる神の顔を避けて、園の木の間に隠れ」たアダムとエバのこと（創世記3:8）を想起させます。

神はすぐに、逃亡しようとした人間を捜し出されました。神は確かに見ておられました。そこで、あらわにされたのは、裸の人間の姿です。ここで言う「裸」の姿とは、神の命令に背き、自分の欲望を優先してしまった神への不従順・罪です。それは、神の裁きをかいくぐり、「神のように」（創世記3:5）なろうとする人の罪です。

「どこに逃れば」と、ある意味では明確な自覚がないにもかかわらず、「ともかく逃げよう、

隠れよう」と、人を駆り立てているものの正体、罪について、聖書は「覆い隠さないように」と警告しています（詩編32:5、51:5、箴言28:13）。その点で、「夜も光がわたしを照らし出す」（詩編139:11）という句がありますが、「わたし」の中の、殊に「罪」が鮮明にされるということでしょう。

次に、死の問題です。

詩編139:8の「陰府に身を横たえようとも 見よ、あなたはそこにいます」の前半は、「陰府に床を設けても」（口語訳）のようにも訳せます。つまり、人が、「死の床に就こうとも」と言い換えられます。死の床に就いて、死んで、そして、人の側から見て、神との交わりが切れたように思われようとも（参照：ペトロの手紙 — 3:19）、ということです。

このように、主なる神の前に、私たちは罪と死の問題を抱えたまま立ち尽くしています。否、御前に立っているというよりも、私たちは意識的に、あるいは、無意識的に（前者以上にこちらが常態化しているでしょうか？）、神から「逃げよう、隠れよう」としています。しかし、「闇もあなたに比べれば闇とは言えない」（詩編139:12）という通り、神は私たちの道をことごとく見通しておられます。

神と人との親密な関係を告げる「見よ、あなた（神）はそこに（ここに）います」（詩編139:8）、「わたし（詩人）はなお、あなたの中にいる」（:18）……共にいます神への信仰告白……は、ただ虚しく響くばかりなのでしょう。

13節に大きな区切れがあるという私の読み方に従えば、詩編の後半へと移る中で、詩人は自分と神との関係に光を当てています。

詩編139:13——

あなたは、わたしの内臓を造り

母の胎内にわたしを組み立ててくださった。

全能なる神、大いなる御業をなす神が、「わたし」を造り、そして、恵みをもってお治めになり、「わたし」を支えてくださっています。「神は何でもできる」（マタイ19:26）という神の全能、御力が、被造物である人間に注がれています。

詩人は、全能なる神を信じることを基として、自分に目を向け、自分の誕生に想いを寄せています（詩編139:13の他 :15,16）。詩人は、ヨブのように透徹した目をもって、自分の人生の来し方行く末を見つめています。

ヨブ記1:20-21——

20 ヨブは立ち上がり、衣を裂き、髪をそり落とし、地にひれ伏して言った。

21 「わたしは裸で母の胎を出た。

裸でそこに帰ろう。

主は与え、主は奪う。

主の御名はほめたたえられよ。」

さて、聖霊の導きのもとに、自分と神との関係に光を当てようとする詩人は、自分の憎しみや怒りを御前に注ぎ出します（詩編139:19-22 参照：同上104:35）。詩人は、神に向かって、不安定な状態にある「わたしの悩み」（詩編139:23）を、激しい感情を覆い隠そうとはしません。

詩編139:21-22——

21 主よ、あなたを憎む者をわたしも憎み

あなたに立ち向かう者を忌むべきものとし

22 激しい憎しみをもって彼らを憎み

彼らをわたしの敵とします。

ここには、自分の誕生以前、母の胎内にいる時から、とこしえ（詩編139:24）に至るまで、常に「わたし」のすべてを神に打ち明けるといふ信仰者の姿勢がうかがわれます。

激しい感情の的が、敵ではなく、和解の主なる神であるならば、それは的外れなことではないでしょう。詩人の「あなた（神）を憎む者」または「あなた（神）に立ち向かう者」との句に昭示されているように、人と神との「我と汝」のなんじ関係は崩れていません。敵に対する激しい憎悪に揺さぶられているときにこそ、「わたしはなお、あなた（神）の中まもにいる」（詩編139:18）といふ言葉は力を発揮します。この信仰告白こそが、「わたし」を護る神のとりで砦です。

詩編139:23-24——

23 神よ、わたしを究め

わたしの心を知ってください。

わたしを試し、わたしの悩みを知ってください。

24 御覧ください

わたしの内に迷いの道があるかどうかを。

どうか、わたしを

とこしえの道に導いてください。

詩人は、「知らず」（統らす）神との交わりが永遠に続くように祈っています。信仰の中心において、ご覧になっている神を、見上げる自分の姿勢が貫かれています。

私たちは、この世の汚れや<sup>まど</sup>惑いに染まりやすいものです。それ故、金属が<sup>まど</sup>るつぼ（耐火性の深皿）で熱せられ、不純物……罪と汚れ……が取り除かれるように、「わたしの悩み」は精錬されなければなりません。それが、「わたしの悩み」が神により試され、そして、そのようにして神に知って治めていただく、ということの真意です。

祈りの最後には、「詩編の門 / 入門」である詩編1と同様に、二つの道が私たちの目の前に横たわっています。詩編1:6には、「神に従う人の道」と「神に逆らう者の道」が出て来ます。

二つの道について祈りを捧げる詩編139:24の優れている点は、以下のことです。

すなわち、「御覧ください ……どうかを。どうか …… 導いてください」というように、選ぶべき道を神の御手にゆだねていることです。しかも、神にまかせっぱなしというのではなく、神からの命令・言葉に耳を傾ける自分の姿勢が整えられています。

まず、神との関係を<sup>た</sup>惑わし絶つような、行ってはならない道、あるいは、引き返さなければならぬ道を、神によって教えていただくことです。次に、信仰の先達たちがたどり、今自分たちが歩むべき道、その「とこしえの道」へと、神によって導いていただくことです。

旧約の詩人が待ち望んだ、神による「とこしえの道」への導きは、「わたしは道であり、真理であり、命である」（ヨハネ14:6）と言われた主イエス・キリストによって成し遂げられました。

説教の最後に、本日の新約の対応箇所を取り上げましょう。

ヘブライ人への手紙4:13――

更に、神の御前では隠れた被造物は一つもなく、すべてのものが神の目には裸であり、さらけ出されているのです。この神に対して、わたしたちは自分のことを申し述べねばなりません。

「……さらけ出されているのです」までは、詩編139の説き明かしで充分だと思えます。

ここでは、「この神に対して、わたしたちは自分のことを申し述べねばなりません」に注目しましょう。

「知らず」（統らす）神との永遠の交わりにおいて、神は私たちに自分のことを申し述べる（釈明する）よう求められています。が、ここで、原文に「申し述べる」は無く、「わたしたちは自分のこと（言葉）を」で終わっている簡略なものですので、余計に解釈が難しくなっています。

神の「言葉」（ヘブライ4:12）から、私たちの「言葉」へという言葉遊び（文学的技巧 / J.

レイリング)の中で、最後の審判において、私たちが神にどのような言葉を語るか、が問われています。それは、まことに厳しいことであると同時に、私たちへの恵みでもあります。

なぜなら、最後の審判に立つ私のかたわらに、弁護者なるキリストがおられ、また、私が言葉を失ったとき、聖霊なる神が私を助けてくださる(マタイ10:20、ローマ8:26)からです。

最後の審判に立つ前の、今日という日のことを、私は想います。

一日が終わる夜の床で、今日のすべてをご覧になっておられた神に、釈明というよりもむしろ、感謝と賛美と告白を、祈りを通じて語ることができれば、なんと幸いなことでしょう。